

「戦後80年を迎える年に」

第11組 廣専寺 近藤 龍磨

2025年2期最終年の活動が、今月7月1日より始まります。これまで「開頭・育成・研修」の三部会体制にて、教区の趣旨に沿いながら風通しの良いセンター活動を目指してきました。2020年発足当初に掲げました「集める教化」から「出向く教化」への取り組みが、具体化され動き始めた2年目でしたが、十分な動きとして周知されたかは、不十分・不透明な感覚の中にあります。

郡上地域から始めました「同朋唱和」として大谷派の基礎的な声明の学び直しを含め、参加者皆様のご意見・助言をいただきながらどの様に展開していくか、道筋がまだ見えてきておりません。皆様（各寺院・組門徒会）のご意見をいただく所存でございます。宜しく願い申し上げます。

また、出向く教化の一環として、昨年が発生いたしました能登半島地震において被災された御寺院・御門徒をはじめ、一般の方々へのお手伝いとして、真宗教化の一環として岐阜地区ボランティア委員会をつくり、まずは教化センターの委員の方に参加を呼びかけ、その後、岐阜地区全寺院に呼びかけ、昨年3月より毎月能登へ出向き、ボランティア活動を行っております。（活動の様子は、岐阜地区出版委員会発行『岐阜同朋131号』掲載）

今年にはいり、他のボランティア活動をされているの方々から能登の方々の声を聞き、

「人が集まり、話ができる場所が欲しい」

という要望に応えるため、先立って活動をされていた団体の「居酒屋風炊出し」

に協力させていただきました。「復興」ではなく「復旧」の一環として、真宗教化で最も大事な傾聴（ただ聞く）という姿勢をもって、被災された人たちの「心の復旧」と、風景を元に戻していく為のお手伝いをしていきたいと願っている、ボランティア委員会一人ひとりの現在地であります。今後も引き続き、活動を行ってまいりますので、皆様のご参加をお願いいたします。

また、この最終年度の取り組みとして、「戦後 80 年」「昭和 100 年」の年に迈り、念仏者の行動とは何なのか、現段階で具体的に出ているわけではありませんが、二度と戦争させてはならないと、そこにフォーカスし考えていきたいと思っております。

戦争アーカイブという企画がある新聞社から出ていることを知りました。当時の民衆の間隔から国の凄まじいまでの言論を含めた厳しい統制によって、国が疲弊していく様・人の心の荒廃、そして終戦直前に敗戦が見えているにも拘らず、勝利へと鼓舞する国民の無残さ、切ないほどの悲壮感等々が報される敗戦前夜がありました。

『この戦争責任は一億全ての肩にある』

と書いた人がいたことも、驚きを持って、その公平さに学ぶべき大切さを思う事です。